精神神経分野における若手団体の 発展と未来

—JSPN 総会・若手シンポジウムからの メッセージ—

曾根 大地¹⁾, 安藝 森央²⁾, 大矢 希³⁾,
黒田 直生人⁴⁾, 平山 貴敏⁵⁾, 堀之内 徹⁶⁾

索引用語 若手団体, 精神神経医学

近年, 若手の医療従事者(目安として40歳未満程度)が集い, 所属施設の垣根を超えたネットワークを形成する団体の設立が各所でみられている。いわゆる縦割りの社会・組織構成のなかで, 異なる国・地域や施設に所属するキャリア初期段階の医師同士がつながることは必ずしも容易ではない。しかしながら, 医療や研究の現場において多岐にわたる役割を果たし, これからの時代の医学界を担っていくのは若手である。第119回日本精神神経学会(JSPN)学術総会では, 若手主導により設立された精神神経分野の3団体によるシンポジウムが行われた。本稿ではその内容や議論を振り返り, 精神神経分野における若手団体の意義や未来について論じたい。

日本若手精神科医の会(Japan Young Psychiatrists Organization: JYPO)は, 若手精神科医の研鑽と交流を目的に2002年に創設された。その後, 法人格を得て現在は認定特定NPO法人となっており, 現役メンバーとして108名が所属している。活動としては, 国内外の若手精神科医向けの合宿型学術総会 Course for Academic Development of Psychiatrists (CADP) を20年間にわたり運営し続けている。また, 国内各所での地域勉強会, 学術活動(国際協働研究, ワークショップ運営), 学会へのワークショップ提供(JSPNほか), 当事者団体との交流などを通して, 若手精

神科医のリーダーシップ養成, 国際的視野の涵養, および地域医療への貢献を mission としている。今後, 若手の横のつながりをつくり, 精神科医が自身のキャリアや人生を考えることができるプラットフォームへと成長させていく必要がある。そのためには, JYPOの卒業生やさまざまな団体との連携をより強化し, 教育リソースの作成が必要である。

若手リエゾン精神科医の会(Junior Section of Ultimate Liaison: JSOUL)は, リエゾン精神科医のニーズが高まるなか, 日本総合病院精神医学会(Japanese Society of General Hospital Psychiatry: JSGHP)における若手のネットワーク構築やスキル向上, リエゾン精神医学の普及啓発などを目的に2019年に設立され, 現在は43名のメンバーをかかえる。JSOULがJSGHPやJSPNを中心にシンポジウムやワークショップを企画し, 活動内容を情報誌にまとめてSNSで発信していたところ, その活動内容がJSGHPに認められ, JSOULメンバーを中心にJSGHP若手委員会が発足した。JSOULは, 多様なニーズのある若手医師が所属でき, JSGHP若手委員会と学会員/非学会員の橋渡的存在としてJSGHPならびにJSPNの活動を盛り上げている。今後は, JSOULとJSGHP若手委員会の連携や役割の明確化が課題である。

国際抗てんかん連盟(International League Against Epilepsy: ILAE)のYoung Epilepsy Section (YES)は, てんかん患者のケアおよびてんかん研究に従事する若手てんかん従事者の国際的組織で, 2018年に設立された。その日本支部で, 2019年10月にILAEおよび日本てんかん学会の公認を得て設立された日本若手てんかん従事者部門(YES-Japan)はアジア初のNational Chapterで, 現在は51名が所属している。YES-Japanはこれまで大きく分けて, (i)国内外の若手との交流の場としてのアジアオセアニア地域での拠点, (ii)研究学術活動, (iii)市民/患者との交流・啓発, (iv)学会活動, (v)多職種連携の5つの

著者所属: 1) 東京慈恵会医科大学精神医学講座 2) 京都大学大学院医学研究科脳病態生理学教室(精神医学) 3) 京都府立医科大学附属病院精神科・心療内科 4) ウェイン州立大学小児科 5) 国立がん研究センター中央病院精神腫瘍科 6) 北海道大学病院精神科神経科

受 理 日: 2023年11月6日

doi: 10.57369/pnj.24-023

活動を行ってきた。YES-Japan の現状の課題としては、臨床/教育面での活動の充実や、社会制度へのかかわり、そしてメンバーのリクルート（特に精神科医や非医師）などがある。

シンポジウム後半の総合討論では、各団体の共通点、相違点、強みとめざす方向性などが共有され、各学会との付き合い方、ジェンダーバランスや多様性の確保、コロナ禍での活動制限と会員確保、卒業年齢の設定などについて活発に議論された。若手主導団体のメリットとして、意思決定に積極的にかかわることによって生まれる責任感や、組織としての行動規範の学びと経験、活動的なメンバーらから得る刺激・動機づけ、所属コミュニティの拡大、SNS などの新しいメディアへの親和性、新規性の高いアイデアと活動展開、若手のニーズを把握しやすいこと、リーダーシップの習得、多施設交流による臨床実践の視野拡大、キャリア相談の幅が広がることなどが挙げられる。

各団体の運営状況や入会条件などの詳細は、ホームペー

ジなど（JYPO：<https://jypo.or.jp>, JSOUL：https://square.umin.ac.jp/psy/content/document/wakate_liaison_psyco_2019.10v.2.pdf, YES-Japan：<https://jes-jp.org/YES-Japan.html>）を参照されたい。なお、本稿の各団体の所属人数は、いずれも 2023 年 7 月時点のものである。これからの医療を支えるために、精神神経分野における幅広い若手の活躍促進をめざす各団体のさらなる発展と、若手医療従事者の積極的な交流や参加を願う。また、シニアの先生方におかれては、周囲の若手にこのような団体の存在を周知していただき、希望する者には活動への参加を積極的に支援いただきたい。

なお、本論文に関連して開示すべき利益相反はない。

謝 辞 本稿の基盤となるシンポジウムの機会をいただいた、第 119 回日本精神神経学会学術総会会長の伊豫雅臣先生（千葉大学大学院医学研究院精神医学）をはじめとした関係者の皆様に心より感謝申し上げます。